四万十町文化的施設基本構想（案）

四万十町教育委員会

平成３１年３月

目　　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第 1 章　四万十町における文化的施設の現状と課題について・・2

1 四万十町の人口動態と社会課題

2 四万十町立図書館利用の現状と課題

3 四万十町立美術館利用の現状と課題

4 子育て・教育施設連携の現状と課題

5 その他の文化施設利用の現状と課題

第 2 章　四万十町の文化的施設のあり方・・・・・・・・・・・・・7

■　基本構想策定のプロセス

■　基本構想策定プロセスでの意見

■　四万十町らしい文化的施設のあり方と期待される役割、そして課題

第 3 章　四万十町の未来をつくる文化的施設づくりにむけて・・14

1 新しい文化的施設のビジョン、コンセプト、アクションプラン

2 新しい文化的施設づくりに向けての検討課題

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

はじめに

四万十町では、「山・川・海 自然が 人が元気です 四万十町」をまちの将来像として掲げています。平成 29 年 3 月には「第 2 次四万十町総合振興計画」を策定し、生涯元気で郷土愛に満ちた人づくりを基本方針の 1 つと定めました。町民が生きがいや誇りを持てるまちづくりにつながる芸術文化・生涯学習の推進を施策目標としています。

この施策目標にあわせるかたちで、平成 29 年度からは四万十町文化的施設検討委員会が設置され、四万十町立図書館および美術館のこれからのあり方と、四万十町の文化を広く見直す検討を進めてきました。本構想は、この検討委員会における議論と町民参加型ワークショップ「まちから考える・まちとつながる文化的施設づくりワークショップ」であげられた町民の声を反映させたものとなっています。

四万十町の文化的施設は、まちの将来を担う子どもたちと子育て世代への充実した図書・情報環境を作り出し、町民の芸術文化的な自己表現・自己実現を支えながら、四万十町の歴史と自然を伝えていく場所となります。また、四万十町を構成する窪川・大正・十和のそれぞれの地域で暮らす人同士が集い語らう交流の場としても機能していきます。同時に、四万十町の外に向けてひらかれ、積極的に情報を取り入れながら、四万十町の中の情報を広く知らせていく情報・交流の拠点として、人が元気なまちを発信し、まちと連携する文化的施設の可能性を広げていきます。

第１章 四万十町における文化的施設の現状と課題について

1　四万十町の人口動態と社会課題

1.1　人口動態

平成 27 年 11 月に策定された「四万十町人口ビジョン」では、大きく 3 つの項目について、2060 年までの四万十町の人口の将来展望を整理しています。

1 つ目の「人口動向分析」では、今後の四万十町の総人口は減少を続け、約 20 年後の 2040 年には 1 万人を割り込むと推計されています。このとき、生産年齢人口の減少は顕著になり、総人口に占める高齢者の割合が増加していくとの予測があります。

2 つ目の「将来人口推計」では、人口減少の推移に応じた分析と地域の将来に与える影響が整理されました。生産年齢人口の減少にともなう自主財源の減少と、進行する高齢化による社会保障費などの増加が懸念され、町民一人あたりの行政コストの増大が予想されています。

これらを受けて、３つ目の「本町の将来展望」では、若い世代が地域に愛着を持ち、このまちに住み続けたいという定住を促すため、就業や子育て面において希望を持って安心して暮らせるまちづくりを目指すことと、地域で支え合える機能的で持続可能な地域の基盤づくりのための、連携した施策整備がまとめられています。

1.2　社会課題

これらの人口動態の推移を考慮し、「第 2 次四万十町総合振興計画」では、まちづくりの課題として以下の 5 点を挙げています。四万十町文化的

施設は、まちが抱える社会課題に向き合い、まちの将来像「山・川・海 自然が 人が元気です 四万十町」の実現に向けて、どのように対応していくべきか検討を重ねていきます。

(1) 町の主要産業の魅力化・生産性の向上

主要産業である第１次産業の活性化のため、農林水産業の魅力化や生産性の向上を進めていきます。

(2) 若い世代が安心して暮らすことのできる魅力ある環境づくり

若い世代、子育て世代が暮らしやすい魅力ある環境を整備するため、子育て支援の充実と仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）に取り組みます。

(3) 郷土愛を育み、未来の四万十町を担う人材の育成

未来の四万十町を担う人材育成のため、子どもたちの郷土愛を育み、大人になっても住みたいと思えるまちづくりを推進します。

(4) 清流四万十川のまちとしての美しい自然環境の創造

自然とともに暮らす生活のなかで、町民一人ひとりが環境に配慮した行動を主体的に実践する「持続的循環型のまちづくり」を構築します。

(5) 安全・安心の確保

町民の生命や財産を守る防災・防犯対策、交通安全対策と、誰もが安心して暮らせる保険・医療・福祉体制の充実に努めます。

2　四万十町立図書館利用の現状と課題

2.1　四万十町立図書館本館

昭和 40 年に開館（現在は旧法務局施設を平成 12 年より利用）し、現在は 40,798 冊を所蔵しています。平成 28 年度の入館者は 18,721 人（一般：15,704 人、児童：3,017 人）、個人貸出冊数は 32,947 冊となっています。読書活動の普及に熱心に取り組んでいますが、地域や学校による偏りが生じているため、広域な町に広く図書館サービスを平準的に届ける工夫が求められています。

図書館としての閲覧席も約 230 ㎡と狭く、児童のためのスペースやおはなし会のためのスペースなどがしっかりと確保できていないことが課題です。また、まちの将来像となる「山・川・海 自然が 人が元気です 四万十町」や、まちが抱える社会的課題に関する情報収集と発信に注力することが求められます。

2.2　四万十町立図書館大正分館

平成 26 年 8 月に開館し、現在は 24,138 冊を所蔵しています。大正地域を中心に図書館サービスの平準化を図る拠点として整備され、十和地域では団体貸出や支所便などを活用しながら学校への図書支援をおこなっていますが、十和地域への支援は不十分となっています。窪川地域と十和地域をつなぐ拠点機能の充実が求められます。

2.3　四万十町十和地域振興局図書コーナー

十和地域の読書環境は、十和地域振興局内にある図書コーナーがあるのみとなっています。大正分館との連携を強化し、大正・十和地域全体での

図書館サービスの平準化と読書活動の推進が急務となっています。

3　四万十町立美術館利用の現状と課題

3.1　四万十町立美術館

平成12年から旧法務局を利用している四万十町立図書館内に設置され、約 700 点の作品を所蔵しています。平成 28 年度の入館者は 1,838 人で、町内在住者や四万十町に縁のある方の作品の展覧会を年 6 回実施しました。美術館として建てられた施設ではないため、作品の展示・収蔵の管理が不十分となっています。作品の収蔵スペースも十分ではなく、水害時に作品が水没する可能性もあるため、適切な作品の管理・保存状態を整備していくことが急がれます。

3.2　ギャラリー喫茶 556

窪川地区にある「ギャラリー喫茶 556」は、アーティストによる芸術品や写真などの展示を週替わりで行い、常に新鮮な美術とのふれあいの場を作り出しています。町内の美術環境を構築する 1 つとして、今後の連携のあり方を慎重に検討していきます。

4　子育て・教育施設連携の現状と課題

子どもや子育て世代と密接に関わる子育て・教育施設において、子どもの読書や学びを支える環境づくりに力を入れています。一方で、必要な人員の確保や専門性をもった人材確保が難しくなっている現状があり、今後どのように連携していけるのか検討が必要です。

5　その他の文化施設利用の現状と課題

5.1　ふるさと未来館

平成 14 年 3 月で廃止となった窪川中学校寄宿舎を平成 16 年度から転用しています。2 階部分で約 160 点の民具や約 1,000 点の埋蔵文化財の保管を兼ねて展示しています。入館者はほとんどいない状態となっており、効果的な展示方法や集客のあり方の検討が課題となっています。

5.2　四万十町民俗資料館

昭和 29 年に建てられた旧営林署を転用していますが、現在一般開放はしていません。古文書や農具、山林具など 1,598 点を収蔵しています。施設の老朽化が著しく、収蔵品の管理・保存状態が懸念されます。平成 3 年に建てられた四万十町郷土資料館との位置付けを、改めて整理していく必要があります。

5.3　四万十町郷土資料館

平成 3 年に開館し、古文書や農具、山林具、縄文時代の石器など 1,422 点を収蔵しています。平成 28 年度の入館者は 1,355 人となっています。住民グループ「大正かざぐるま」が管理を行っています。学校や地域との連携に取り組んでいますが、展示物の入れ替えがほとんどできていないことが課題となっています。

5.4　旧大道中学校

旧昭和村役場に保管してあった民具 668 点の保存場所となっています。実情は放置に近い状態となっており、今後の資料の管理・保存計画を整理する必要があります。

5.5　古民家カフェ半平（旧都築邸）

明治 34 年に建てられた旧都築邸を古民家カフェ半平として改装し、特定非営利活動法人 LIFE が運営・管理を行っています。さまざまなイベントや展示会、講座などが開催されていることから、町内における実質的な文化施設の役割を果たしています。四万十町の歴史や岩本寺・旧都築邸とつながる場として、新しい文化的施設との連携が重要になってきます。

また、上記に限らずに施設のあり方・連携のあり方を多角的かつ継続的に検討します。

第 2 章　四万十町の文化的施設のあり方

■　基本構想策定のプロセス

≪四万十町文化的施設検討委員会の開催≫

【平成 29 年度】

・第 1 回四万十町文化的施設検討委員会

平成 29 年 9 月 30 日（土）10:00～12:00

検討委員会設置と今後のスケジュールの説明と町内の文化的施設の現状と課題を整理し、実際に現地を視察しました。

・第 2 回四万十町文化的施設検討委員会

平成 30 年 1 月 23 日(火) 14:00～17:00

今後の検討委員会の協議内容の方向性と文化的施設像についての意見交換を行いました。

・平成 30 年 3 月 4 日（日）「瀬戸内市民図書館もみわ広場」の視察

岡山県瀬戸内市の「瀬戸内市民図書館もみわ広場」を視察しました。

【平成 30 年度】

・第 1 回四万十町文化的施設検討委員会

平成 30 年 5 月 8 日(火)10:00～12:00

瀬戸内市民図書館視察の関する報告と意見交換を行い、その後、今年度の取り組みについて整理しました。

・第 2 回四万十町文化的施設検討委員会

平成 30 年 8 月 5 日（日）10:30～16:30

前半は事業者から町民参加のワークショップに関する説明を行い、後半はまちあるきワークショップ【座学編】に参加しました。

・第 3 回四万十町文化的施設検討委員会

平成 30 年 9 月 24 日（日）13:30～16:30

まちあるきワークショップ【実践編】に参加しました。

・第 4 回四万十町文化的施設検討委員会

平成 30 年 10 月 14 日（日）13:30～16:30

ストーリーづくりワークショップに参加しました。

・第 5 回四万十町文化的施設検討委員会

平成 30 年 11 月 25 日（日）13:30～16:30

これまでの検討委員会での議論とワークショップ開催報告書をもとに、基本構想骨子を確認し、まとめに向けた方向性を議論しました。

・第 6 回四万十町文化的施設検討委員会

平成 31 年 1 月 22 日（火）13:30～16:30

「四万十町文化的施設基本構想（案)」についてまとめの議論を行い、内容等についての最終的な整理を行いました。

≪住民参加型ワークショップの開催≫

・まちあるきワークショップ【座学編】

平成 30 年 8 月 5 日（日）10:30～16:30

文化的施設に対しての夢や希望を短冊に書き、笹に飾って役場や大正分館などで展示しました。

・中高生ワークショップ

平成 30 年 9 月 23 日(土)13:30～16:30

窪川高校、四万十高校生を中心とした中高生 8 人と一緒に、中高生にとって居心地のよい場所をまちとのつながりを考えながら話し合いました。

・まちあるきワークショップ【実践編】

平成 30 年 9 月 24 日(日)13:30～16:30

参加者と委員、役場職員が一緒にグループをつくり、それぞれのコースでまちを歩きながら、まちの魅力や課題を再発見し、文化的施設とのつながりを考えました。

・ストーリーづくりワークショップ

平成 30 年 10 月 14 日（日）13:30～16:30

文化的施設ができることで生まれる利用者のストーリーを考えていきました。さまざまな背景をもつ利用者が文化的施設を通して、どのような体験ができるとよいか話し合い、文化的施設のあり方を具体的にイメージしていきました。

■　基本構想策定プロセスでの意見

・ 四万十町文化的施設検討委員会からの意見

・会議録より一部意見を引用します。

「図書館と一言に言っても、昔の図書館のイメージからいまはだいぶ変わ

ってきている。町民だけではなく、他のまちから四万十町に通って来る人や子どもたちはそれぞれ違った図書館のあり方を求めているかもしれない。広く意見を聞いて、図書館のあり方を柔軟に考えてもいい」。

「いまの美術館はスペースも限られていて入りづらい雰囲気がある。作品の保存については水害の恐れもある」。

「美術館の利用者を増やしていくためには、大人と子どもが一緒に入りやすくなるための工夫が必要。すごい先生方の絵ではなくても、子どもたちの描いた絵を展示できれば親も一緒になって楽しめるようになる」。

「民具は土地の人々の暮らしや町の歴史が伝わる貴重なものなので、置きっ放しの現状を見るのは辛い。きちんと整理して展示するためにも、場所だけではなく、管理・運営する人が重要になってくる」。

「窪川高校や四万十高校をはじめ、四万十町の子どもたちと一緒にワークショップを通して、子どもたちがまちの新しい文化的施設について主体的に関わる意識を醸成していくことが大切」。

「四万十町は合併により広域になっていて、文化的施設が窪川に建てられた時に、別の地域に住んでいる方は普段あまり来ないようになってしまうかもしれない。施設ができたあと、どのように文化的施設が「私たちごと」なのだと認識できるだろうか」。

「四万十町の自然（山・川・海）を意識した、四万十町らしい施設整備づくりを目指していくべき」。

・「瀬戸内市民図書館もみわ広場」の視察からの意見

平成 30 年 3 月 4 日（日）に 10 名の委員で視察しました。視察した委

員からは「ハードとしての設計とソフトとしての図書館サービスや郷土資料展示が有機的につながり、それぞれがよくデザインされている」と概ね高い評価となりました。特に「施設整備段階で館長候補を公募したことや、町民や子どもたちの対話を重視したワークショップ手法は四万十町にとっても参考になる」との意見がありました。

・住民参加型ワークショップからの意見（詳細はワークショップ開催報告書を参照）

「ただ本があるだけの場所ではなく、新しい知識や文化に触れ、人々が集まり交流できる場所になってほしい」。

「文化的施設が町の中だけではなく、町の外ともつながる拠点として機能できるといい」。

「高校でたった一人の美術部として活動しているので、新しい美術館にとても期待している。ただ作品を展示するだけではなく、アトリエなど創作活動ができる空間もあって誰でも自由に使える場所になるといい」。

■　四万十町らしい文化的施設のあり方と期待される役割、そして課題

・四万十町らしい文化的施設のあり方と期待される役割

四万十町文化的施設を考えるワークショップ開催報告書では、各回での意見を集約し、主に以下のような点が整理されました。町民・中高生とのワークショップを通じて出てきたこれらの意見を、文化的施設のあり方と期待される役割としてさらに検討を進めていきます。

■ 第 1 回「まちあるきワークショップ【座学編】」

・「コミュニティの拠点として、人や地域とつながりたい」

・「子どもたちの居場所、新たな気づき・学びの機会を増やしたい」

・「多様な文化的体験をしたい」

・「くつろげる空間がほしい」

■ 第 1 回「中高生ワークショップ」

・「中高生がやりたいことができ、かつ居心地のよい場所はまちのなかに少なくなっている」

・「インターネットを通じた SNS のなかが居心地のよい居場所となっている」

■ 第 2 回「まちあるきワークショップ【実践編】」&第 3 回「ストーリーづくりワークショップ」

・「交流とくつろぎの場、若者の居場所」

・「四万十町全体へ広がる機能と工夫」

・「ものづくり・場づくりを通じた自己表現の場」

・四万十町らしい文化的施設の課題

コミュニティや交流の拠点や子どもたちの居場所となるような施設づくりを目指すにあたって、課題に挙げられるのは(1)「職員体制」、(2)「交通アクセス（駐車場、バス等)」、(3)「窪川、大正、十和の各地域への配慮」、(4)「四万十町の中と外をつなぐ工夫」、(5)「四万十町らしさを発信する工夫」の 5 点です。

(1)「職員体制」

現状の図書館・美術館も十分とは言えない人員配置となっており、今後の施設整備から運営に向けて人材の確保・育成が大きな課題となっていきます。施設を長く生かし続けるためにも、施設整備のハード面だけではなく人員的なソフト面の検討も進めていくことが非常に重要です。

(2)「交通アクセス（駐車場・バス等)」

文化的施設の立地を考慮した慎重な検討が必要です。同時にまち全体に活気をもたらすため、まちのなかを人が歩く工夫を考えることも求められます。高齢者や未成年といった交通弱者への配慮をふまえ、まちと人と施設の関係を整理した検討が必要です。

(3)「窪川、大正、十和の各地域への配慮」

広い町域に向けて公平なサービスを提供するための工夫が求められます。施設が建てられる地域以外に住んでいるから不便だと感じられないよう、最新技術の導入の検討や施設同士の連携の可能性を探っていくことが大切です。四万十町のどこに住んでいても、それぞれの生活にあった形でサービスが行き届く仕組みを検討する必要があります。

(4)「四万十町の中と外をつなぐ工夫」

中山間地域である四万十町に常に新しい知識と情報を取り入れる一方で、四万十町の外に向けて、四万十町らしさを積極的に発信する機能とそれを支える技術の導入が求められます。文化的施設が、人と自然が支え合う四万十町と人々の情報を広く発信していくことで、他の

まちやひととつながるきっかけを生み出す工夫が求められます。

(5)「四万十町らしさを発信する工夫」

新しい文化的施設は「四万十町らしさ」にこだわり、まちのあらゆる情報を収集するだけではなく、積極的に発信していく施設となることが求められます。これまでの図書館・美術館での取り組みを発展させ、町民への情報発信だけではなく、町外の人々に対しても「四万十町らしさ」を発信する工夫が求められます。

第３章 四万十町の未来をつくる文化的施設づくりにむけて

1　新しい文化的施設のビジョン、コンセプト、アクションプラン

1.1　新しい文化的施設のビジョン

新しい文化的施設の誕生によって生み出す未来予想図を示します。

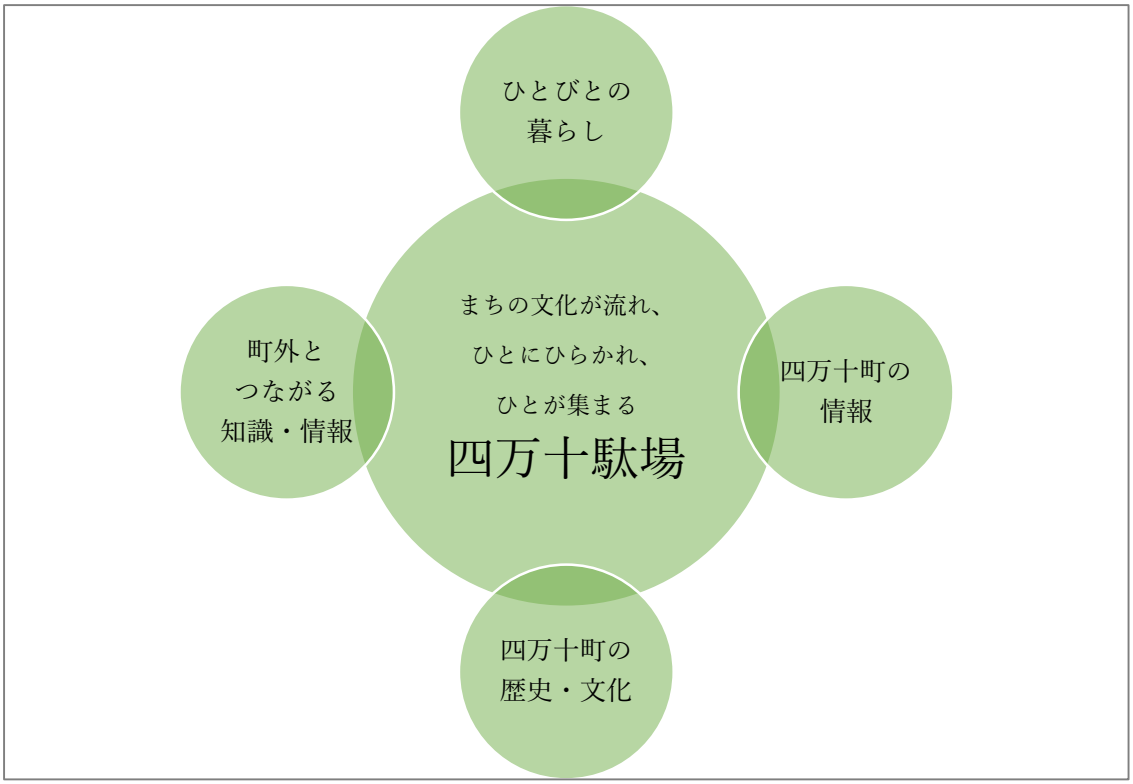
四万十町文化的施設のビジョン

「まちの文化が流れ、ひとにひらかれ、ひとが集まる四万十駄場」

四万十川の豊かな自然に育まれた四万十町らしい文化は、四万十川の流れのように常に変わらず流れ、このまちに暮らす人々に受け継がれ、まちを巡っていきます。「駄場」とはひらけた土地のことを表しますが、現在では、人が自然と集まり交流する場所の意味合いでも使われています。四万十町の新しい文化的施設も同様に、様々なストーリーをもつ人々が融合し、入り混じっていくような場となっていくイメージを込め

て、ビジョンを定めました。

四万十町の文化を四万十川の流れにたとえ、常に新しい知識や情報が滞ることなく流れ、人々の生活に浸透し、世代を超えて文化が循環していくことをイメージしています。これまでの四万十町の文化を守りながら、これからの四万十町の文化を生み出す場として、本来あるべき駄場のようにまちとひとにひらかれた施設となり、様々な情報が集まり、情報を発信していく場となることを目指します。この施設があることによって、四万十町の風土を受け継ぎ、四万十町に集う一人ひとりの生活が豊かになるビジョンを描いていきます。



1.2　ビジョンにつながるコンセプト（ミッション）

四万十町文化的施設のビジョン「まちの文化が流れ、ひとにひらかれ、ひとが集まる四万十駄場」を実現するうえで欠かせない大きな柱を示します。

四万十町文化的施設のビジョンにつながるコンセプト
「人・自然・文化　～やわらかい社会をつくる～」

これは、四万十町が掲げる町の将来像「山・川・海 自然が 人が元気です 四万十町」に、文化的施設が応えていくものとして整理しました。文化的施設が四万十町の人と自然、文化をつなぎあわせることで、四万十町で暮らす子どもからお年寄りまで町民の誰もが、まち全体とつながり、生き生きと活動・活躍できる場となっていくサイクルを生み出していきます。

人・自然・文化のそれぞれにつながっていくように、これまでの四万十町立図書館と美術館が果たしてきた役割を整理しながら、これからのあり方を発展させていきます。

これまで四万十町立図書館が役割を果たしてきた読書支援、学習支援、調査研究、地域資料や郷土資料の保存といった伝統的図書館の要素をさらに充実・強化し、同時にこれからの新しい文化的施設のなかでは、新しい要素として、創造、交流、活用へと発展させていきます。これは窪川・大正・十和といった四万十町のまち全体だけに留まらず、四万十町

の外に向けても創造、交流、活用の機会を創出していくことを目指します。四万十町の人と自然・文化を通して新しいものを作り出し、自己表現の活動を促進し、これまで気がついていなかったひとの魅力、まちの魅力に気がつき発信する役割を担っていきます。地域に眠っている郷土資料を活用し、資料と人々がつながる取り組みを積極的に行っていきます。

四万十町立美術館は、美術館本来の役割として、展示作品を楽しみ、味わい、ふれるといった一方向でのみの環境を提供してきました。これからの新しい文化的施設のなかでは、交流と創造といった活動を通して双方向に美術（アート）とふれあい、多くの人とわかちあい、かさねあうような要素を取り入れていきます。施設ができてからも持続する活動プログラムとして、地域資料や郷土資料を題材にするなど、町民参加で地域と向き合うアートの実践を整備計画段階から行っていきます。こうしたプログラムの積み重ねによって地域がひらかれ、やわらかい社会をつくることにつながっていきます。

文化的施設は、図書や美術（アート）を入り口に、郷土資料や音楽、演劇といった多様な芸術・文化的要素を子どもからお年寄りまで誰もが気軽に取り入れられるよう、柔軟性と可変性を備えた町民の創造活動を支える施設を目指します。まちのアトリエとして機能し、新しい交流や創造の場を創出しながら、世代を超えた町民同士のつながりや町外とのつながりをつくりだしていきます。

「人が元気です」の言葉どおり、この施設に集う人々が想像や交流を

通して、まちのひとや自然、文化とつながり、自分らしく生き生きとした生活を過ごしていく場を目指していきます。そのために、文化的施設はやわらかな社会参画の場となり、人々の生活の豊かさにつながるようなプログラムを提供していきます。具体的なプログラムとしては、人々の知りたいという問いに応え、思いに寄り添いながら、一緒に調べていくサービス（レファレンスサービス）などの充実を検討していきます。

1.3　コンセプト実現のためのアクションプラン

コンセプトを実現する具体的なアクションプランとして、以下のように整理しました。

- ◆ 図書館と美術館を核として、ハードとソフトが有機的に連携する手法を検討する
- ◆ 岩本寺や古民家カフェ半平（旧都築邸）、お遍路道など町の重要な場所と連携する手法を検討する

  （参考：中西繁先生の講演内での指摘）

  「まちの歴史の文脈上、岩本寺と参道は重要な要素である」

  「増える空き家、空き店舗問題を考えることが必要である」
- ◆ 町全体に根づく美術作品の展示文化を発展させ、多様なテーマでの展示を町内各地で開催する

  例：パネル展「四万十町と幕末維新 草莽の志士たち」

  （平成 30 年 11 月 2 日～11 月 18 日）
- ◆ 展示を入り口にした研究や学びの場を企画・開催する
- ◆ まちのイコールパートナーとなるサポーター制度を整備する

2　新しい文化的施設づくりに向けての検討課題

2.1　検討していくべき課題

ビジョン、コンセプト、アクションプランの実現に向けて、引き続きの検討と四万十町としての意思決定が必要な事項を整理していきます。

1. 市街地の再生を促すまちづくりを考慮した文化的施設の立地の検討
2. 町域全体に広がる文化的施設のサービス計画の検討
3. 町内の既存の文化・教育施設との連携方法の検討
4. 町内に点在する文化的資料の整理と把握および今後の方針の検討
5. 町民と協働する四万十町らしい文化的施設の運営方針・職員体制の検討

2.2　検討の想定スケジュール

現段階で想定できる検討スケジュールを下記のとおり整理します。

年度	検討内容
平成 30 年度	基本構想の策定
平成 31 年度	基本計画の策定 設計事業者の公募
平成 32 年度	管理運営サービス計画の検討 基本・実施設計
平成 33 年度	着工
平成 34 年度	竣工 施設移転作業（引っ越し） 開館準備作業 開館

おわりに

四万十町文化的施設の基本構想が、四万十町文化的施設検討委員会をはじめ、町民参加型ワークショップにより検討され、まとまりました。

基本構想策定においては、文化的施設に対する「要望」といったことだけではなく、「自分はどのように活用したいのか。」「そのためにはどのような施設にしたいのか。」など、利用者目線と長期的視点に立ち、様々なストーリーを描きながら進めてきました。

いま社会は、情報化・グローバル化の時代を迎え、人工知能（ＡＩ）・ロボット等の進展により日々変化し、人生１００年時代を迎えようとしています。文化的施設はこれからの時代を見据え「まちづくりや地域活性化の核」として地域の発展や豊かな暮らしに貢献する施設となり、人々が情報を得たり学んだり、地域間の交流促進や繋がりを生むなど大きな役割を果たす施設となることを期待します。

また、「次世代を担う人づくりの場」、「新しい自分を発見できる生涯学習の場」、「思い思いの時間が確保され心がトキメキ揺さぶられるような場」になればと考えます。

町民の皆様方には、これからの四万十町の文化の息吹を感じて欲しいと思います。

この基本構想は、今後策定を予定している基本計画や基本設計・実施設計など、文化的施設整備に関する計画を進めて行くうえで根幹となる構想です。これまでの検討経過や町民ニーズを踏まえ、四万十町の未来を創る文化的施設の役

割や課題を明確にしながら、新しい図書館及び美術館の機能やサービスなどの方向性を示すことを目的としています。文化的施設が子どもから高齢者まで幅広い世代に愛され、四万十町の未来の進展に通じる文化の拠点施設となることを願います。

最後に、四万十町文化的施設基本構想の策定にご協力いただきました皆様方に、心から感謝申し上げます。

四万十町教育長　川 上 哲 男